オスマン帝国における1909年「3月31日事件」に関する研究動向

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学東洋史談話会 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢本, 彩 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21974

《研究ノート》

オスマン帝国における1909年「3月31日事件」に関する研究動向

矢本　彩

1．はじめに

（1）本稿の目的

1908年7月23日に「立憲政の宣言（Meşrutiyet İlânı）」や「自由の宣言（Hürriyet İlânı）」とも呼ばれた青年トルコ人革命（Young Turks Revolution/ Jön Türkler İhtilâli）が起こった。その名のとおり、1878年以来スルタン・アブデュルハミト二世（II. Abdülhamid, 在位1876-1909年）によって一時停止されていたオスマン帝国憲法の復活が宣言され、民衆は自由の訪れを心から喜んだ。しかしながら青年トルコ人革命の立役者たる統一と進歩協会（İttihât ve Terakkî Cemiyeti）所属の若い将校らは、民衆の意図する自由がストライキやデモという形で表面化したことを受け、抑圧の姿勢を見せた。市井に暮らす民衆や労働者だけではなく、オスマン知識人、メドレセでイスラーム諸学を学ぶ学生、軍人、そして非ムスリムに至るまでさまざまな立場の人たちが、大なり小なり不満を抱くようになった。その不満が膨れ上がった結果として1909年4月13日、「3月31日事件（31 Mart Olayı）」が起こった。

以上のように「3月31日事件」にさまざまな立場の人が関わったことを考慮すれば、事件の原因を一つに断定して論じることは不可能であり、事件の本質を捉えにくくすることになる。従来この事件は、「イスラーム主義」、「反革命」、そしてクーデタなどさまざまな評価を得ていたが、いずれの評価も事件の一側面を指摘したものにすぎず、多様な角度からの研究が進められるべきである。加えて、「3月31日事件」を鎮圧したのが後のトルコ共和国初代大統領を務めたムスタファ・ケマル・アタテュルク（Mustafa Kemal Atatürk, 生没1881-1938）であった。このため「3月31日事件」が復古を求める旧体制派の「反革命」であったという認識が必要以上に強められたと指摘できる(1)。

このような前提条件のもと、先行研究では「3月31日事件」に関わった人びととその背景に依拠して事件原因が大きく三つに分類されてきた。一つ目は、青年トルコ人内部の派閥争いに端を発する政治の問題、二つ目は、軍内部の組織再編成による「叩き上げ将校」対「士官学校出身将校」という対立軸、そして三つ目は、徴兵免除試験再開決定に伴うメドレセ学生および宗教関係者の政府への反発である。

本稿では、「3月31日事件」の発生以降、事件がどのような評価を得て、いかなる研究が行われてきたのか、研究史の整理をすることが目的である。その分類方法として(1)事典や概説書といった基本的な文献、(2)「3月31日事件」の専論、そして事件参加者や原因から分類される事件の性質として(3)政治の問題、(4)軍隊内の対立、そして(5)宗教・教育問題という個別分野の研究、加えて事件首謀者といわれた人物を中心とする(6)出版・新聞に関する研究、以上六つの項目に分けて研究史を整理する。本稿はさまざまな評価がなされた「3月31日事件」を客観的にとらえ直し、事件の本質を明らかにするための重要な作業となると考えられる。

（2）「3月31日事件」とは

1909年4月13日未明に発生したこの事件は、当時オスマン帝国でおもに使用されていた財務暦であるルーミー暦1325年Mart月31日に発生したため「3月31日事件（31 Mart Olayı）」といわれている。トルコ語で「事件」にあたる部分に使用された単語は表1のとおりである。

表1：「事件」の原語となるトルコ語一覧（アルファベット順）

単語	意味	語源（言語）	語源（意味）
Ayaklanma	謀反、反乱、反抗	トルコ語	足（ayak）+自動詞化の接尾辞
Hâdise	紛争、事件	アラビア語	出現（hudūs）
ihtilâl	革命	アラビア語	破壊、混乱、騒動（ḫalel）
İrticâ	反動、政治反動	アラビア語	戻る、戻す（rucū）
İsyân	反抗、反乱	アラビア語	反抗（‘iṣyān）
Olay	事件、出来事、現象	トルコ語	存在（olan）
Vak‘a	事件、出来事	アラビア語	発生（vuḳū‘）

出典：竹内2015, AYVERDİ 2005[2]

同事件は、「発生（vukû bulmak）」が語源のVak‘a（事件、出来事）やOlay（事件、出来事、現象）のほかAyaklanma（謀反）、Hâdise（紛争）、İsyân（反乱）、あるいは革命を意味するİhtilâlと呼ばれてきた。英語では「3月31日事件（31 March Incident, 31 March Event）」といわれるか、あるいは「反革命（Counter-revolution）」と表現されることが圧倒的に多い[3]。日本語ではその評価はともかくとしてもっぱら「3月31日事件」と訳されてきた。このように「3月31日事件」の訳語や呼称からも事件への評価が多様な価値観を含んでいたことが理解できるため、まずは各言語における「3月31日事件」の位置づけや評価を明らかにしていく。

2．研究動向

（1）事典および概説書における評価

まず、オスマン史研究における研究資料としては各種の事典類が挙げられる。

表2：トルコ語の事典における「事件」の表記（筆者作成、註4参照）

	出典（事典名）	名称	副題ほか	評価
1	*TA* (1977)	31 Mart Vak'ası	Askerî Ayalanma	
2	*TCTA* (1985)	31 Mart İsyânı		İrticâî Nitelik
3	*DBİst.A* (1994)	31 Mart Olayı	Son Ayaklanma	
4	*Türkler* (2002)	31 Mart Vak'ası		
5	*DİA* (2007)	31 Mart Vak'ası	Askerî İsyân	

『トルコ事典（*Türk Ansiklopedisi*, 以下 *TA*）』のİ. パルマクスズオウル「3月31日事件（Otuzbir Mart Vak'ası）」（1977）の項目では「軍事謀反（Askerî Ayaklanma）」と説明されている。また『タンズィマートから共和国へ至るトルコ事典（*Tanzimat'tan Cumhuriyet'e Türkiye Ansiklopedisi*, 以下 *TCTA*）』のK. カヤル「軍および治安（Ordu ve Güvenlik）」（1985）の項目では「3月31日反乱（31 Mart İsyânı）」を「反動的な性質（İrticâî Nitelik）」を有する反乱（İsyân）と表現している。『過去から現在へ：イスタンブル百科事典（*Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi*, 以下 *DBİst.A*）』のN. サカオウル「3月31日事件（Otuzbir Mart Olayı）」（1994）では、まず同事件をオスマン帝国史上、最後に発生した謀反（Ayaklanma）と書き出すところから始まっている。そしてまとめにおいても過去のほかの謀反（Ayaklanma）同様に、為政者の交代によって幕を閉じていることからも、最後の謀反（Ayaklanma）といえると述べた。事典類の中でも最も詳細に記されているのは『トルコ人（*Türkler*）』のA. ビリンジ「3月31日事件の解釈（*31 Mart Vak'ası'nın bir Yorumu*）」（2002）である。「3月31日事件」は第二次立憲政期のみではなくオスマン帝国史全体をとおして見ても最も議論されてきた問題の一つであり、事件がシャリーアを求める人びとによる謀反（Şerîatçı bir Ayaklanma）なのか、軍事反乱（Askerî bir İsyân）なのか、またはかねてより政府が計画していたのか、その多様な評価と可能性を列挙した。結論としては事件の性質を一つに絞ることはしておらず、「3月31日事件」は事件そのものよりも後世へ与えた影響の方が重要視されると述べた。また、後述するとおりトルコ語文献では一般に「3月31日事件」は軍人主体で起こされた事件であるという見解が多いが、*Türkler*（2002）では非軍人や非オスマン・トルコ語話者も多数加わっていたことに関する研究および議論の不足が指摘された。そして『トルコ宗教財団イスラーム百

科事典（*Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, 以下 *DİA*）』の「3 月 31 日事件（Otuzbir Mart Vak'ası）」（2007）の項目を執筆した A. オズジャンは「アブデュルハミト二世の退位で終結した軍事反乱（II. Abdülhamid'in Tahttan İndirilmesiyle Sonuçlanan Askerî İsyân）」という副題を付し、統一と進歩協会の政策に対する反動で起こされたこの事件は、軍が極度に政治に介入したことや、かねてから内在していた叩き上げ将校と士官学校出身将校の対立などを主たる原因に起こされたと述べた(4)。以上、各種事典では「3 月 31 日事件」を表すために反乱や謀反を意味する単語よりも、事件や出来事を意味する Vak'a や Olay という中立的な言葉が選ばれてきた。

表 3：トルコ語の概説書における「事件」の表記（筆者作成、註 5－10 参照）

	出典（研究者名）	名称	副題ほか	評価
1	İ. H. DANİŞMEND (1972)	31 Mart Vak'ası		İrticâî Hâdise
2	M. TUNÇAY (1989)	31 Mart Olayı		Hükümet Darbesi
3	Y. H. BAYUR (1991)	31 Mart Ayaklanma	Olay, Vak'a	
4	E. Z. KARAL (1996)	31 Mart İsyân	Gericilerin Ayaklanması	
5	T. Z. TUNAYA (2001)	31 Mart Olayı, İrticâ		İslâmcılık
6	H. İNALCIK (2016)	31 Mart İrticâ		İslâmcılık

次に、トルコ語で執筆された概説書である。İ. ダニシュメンドの『詳説　オスマン史年代記（*İzahlı Osmanlı Tarihi Kronolojisi*）』(1972) では「3 月 31 日事件（Vak'a）」は反動事件（İrticâî Hâdise）であり、かねてより指摘されていたスルタン・アブデュルハミト二世の関与を否定している。最も人びとに影響を与えたものの一つに、統一と進歩協会に反対する立場の新聞として『ミザン（*Mizan*）』紙と『火山（*Volkan*）』紙を挙げた(5)。

S. アクシン編纂『トルコ史 4：現代のトルコ 1908～1980 年（*Türkiye Tarihi 4: Çağdaş Türkiye 1908~1980*）』(1989) の M. トゥンチャイ執筆の第一章「政治史　1908-1923 年」では、「3 月 31 日事件」は軍人とメドレセ学生が結託し人びとを仲介したことによって起こされたクーデタ（Hükümet Darbesi）であると述べた(6)。

Y. バユルは『トルコ革命史（*Türk İnkılabı Tarihi*）』(1991) のなかで「3 月 31 日謀反（Ayaklanma）」はアブデュルハミト二世退位のきっかけとなった出来事（Olay, Vak'a）ではあるが、アブデュルハミト二世自身は事件への関与を否定したと記した。またこの出来事が誰によって計画されたのかは明確ではないとしながらも、同事件が軍人らによる謀反であり政治反動の試みとして起こされたものであると評価した(7)。

E. カラル『オスマン史　第 9 巻：第二立憲政および第一次世界大戦 (1908-1918)（*Osmanlı Tarihi*

IX. cilt İkinci Meşrutiyet ve Birinci Dünya Savaşı 1908-1918)』(1996) の第4章「保守派の謀反：アブデュルハミト二世の退位（Gericilerin Ayaklanması Abdülhamit'in Tahttan İndirilmesi)」で「3月31日反乱（İsyân)」の詳細を記した。本章では同時代の政治的、社会的背景を記すよりも先に事件首謀者といわれたデルヴィーシュ・ヴァフデティ（Derviş Vahdeti, 生没 1870-1909）および彼が出版責任者を務めた『火山』紙の詳細を述べた上で事件に至る過程を記したことから、同事件をヴァフデティら保守派による反動事件と評価していることは明白である(8)。

T. トゥナヤの『トルコにおける政治的発展（1876-1938）：オスマン帝国憲法と立憲政期 1876-1918（*Türkiye'de Siyasal Gelişmeler, 1876-1938: Kanun-ı Esasî ve Meşrutiyet Dönemi, 1876-1918*)』(2001) はタイトルのとおり 1876 年から 1918 年という第一次立憲政期から第二次立憲政期に至る内政問題に焦点をあてた研究書である。第二次立憲政期に力を示した政治潮流の一つとして「イスラーム主義」を挙げ、それが顕在化した最も重要な出来事の一つにルーミー暦 1325 年 Mart 月 31 日の反動（İrticâ）を挙げている。つまり「3月31日事件」を「イスラーム主義」による保守派の運動と評価している(9)。

これを踏まえてオスマン史の大家 H. イナルジュクは『至高の国家：オスマン帝国に関する研究4（*Devlet-i 'Aliyye Osmanlı İmparatorluğu Üzerine Araştırmalar-IV*)』(2016) の中で、トゥナヤの研究を参照し「3月31日反動（İrticâ)」を「イスラーム主義」の時代潮流の中で起こった最も重要な動きの一つと位置付けた(10)。

このようにトルコ語の研究では政治的な対立や、軍事的な反乱という評価が定着していながらも、「イスラーム主義」的な要素にも言及されてきた。

一方の英文研究では、表4のとおり「反革命（Counter-revolution)」と表記されることが多く、その反動行動を起こしたのが保守派、つまり「イスラーム主義」による事件であると評価されてきた。

まず事典類における同事件の評価は次のとおりである。*Encyclopedia of Islam New Edition* の J. H. クラマーズ「オスマン朝（Osmanli)」(1995) の項目では、スルタン権力の復活を求めた試みが 1909 年 4 月 13 日に起こされたことが記された。そして同事典の Ş. ハーニオウル「新式軍（Nizam Askeri)」(2004) の項目では 1908 年の青年トルコ人革命に対する反革命が叩き上げ（Alayli）の将校らによって起こされたと記された。M. ミュンゲチは *Encyclopedia of Islam and the Muslim World* の Young Turks (2004) の項目で、1909 年 4 月にイスラーム勢力によって導かれた反乱（Insurrection）において、ムスリムの影響力は明白であったと述べた。そして *Encyclopedia of the Modern Middle East and North Africa* の H. カヤル Committee for Union and Progress（2004）の項目では、統一と進歩協会が 1909 年 4 月の革命的な試み（Revolutionary Attempt）以降、より直接的な統治を行い政治に影響力を持つようになったと述べられている(11)。

表4：英文の事典・概説書における「事件」の表記（筆者作成、註11－26参照）

	出典	名称	副題ほか	評価
1	L. LEWIS (1955)	Thirty-First of March Incident		Revolt
2	K. KARPAT (1959)	March 31 Event		Revolt, Upheaval
3	B. LEWIS (1961)	Reactionary Rising		Mutiny
4	F. AHMAD (1969)	Counter-revolution		
5	S. SHAW & K. SHAW (1977)	Counter-revolution		
6	L. KINROSS (1977)	Counter-revolution		Mutiny
7	Ç. KEYDER (1987)	Counter-revolution		
8	A. PALMER (1992)	反革命クーデター	イスラーム主義政権樹立の要求	
9	E. ZÜRCHER (1993)	Counter-revolution		Insurrection
10	*Encyclopedia of Islam New Edition* (1995)	Attempt (オスマン朝 Osmanli)	Attempt to Re-establish Sultan's Authority	
11	Ş. HANİOĞLU (1995)	Counter-revolution		
12	E. ZÜRCHER (1996)	Ides of April	Fundamentalist Uprising	
13	L. MACFIE (1998)	Counter-revolution		
14	J. McCARTHY (1997&2001)	Counter-revolution		
15	A. KANSU (2000)	Coup d'état of April 13	Event of March 31	
16	*Encyclopedia of Islam New Edition* (2004)	Counter-revolution (新式軍 Nizam Askeri)		
17	*Encyclopedia of Islam and the Muslim World* (2004)	Insurrection (Young Turks)		
18	*Encyclopedia of the Modern Middle East and North Africa* (2004)	Counterrevolutionary Attempt (Committee for Union and Progress)		
19	Ş. HANİOĞLU (2008)	Event of March 31	Counter-revolution'	Revolutionary

概説書ではまず、L. ルイス著 *Turkey* (1955) は、「3月31日事件 (Thirty-First of March Incident)」はシャリーア法に従った統治と政府を求めて起こされた事件であり、新聞『火山（*Volkan*)』が人びとを扇動したと記した(12)。

そして K. カルパトの論文集 *Turkey's Politics: The Transition to a Multi-Party System* 所収の "Ottoman Empire and the Beginning of the Reform Movement"（1959）では「3月31日事件（31 Mart Vakası, March 31 Event)」は自由党（Ahrar, Liberal Party)、ムスリム統一協会（İttihadı Muhammedi, Islamic Unity Party)、国民献身協会（Fedakâranı Millet, National Volunteer Association）などが画策し

た宗教的な動乱（Upheaval）であり暴動（Revolt）であったと述べた[13]。

同様にB. ルイスは、*The Emergence of Modern Turkey*（1961）で「反動事件」は実質的に軍人よってもたらされた反乱（Mutiny by the Soldiers）だが、『火山』紙を出版していたベクタシ教団のデルヴィーシュであったヴァフデティや「ムスリム統一協会（Muhammadan Union）が重要な役割を果たしたと述べた。内容を補足するならば、ヴァフデティが青年期にベクタシ教団の教義を学んだことは確かだが、彼は「デルヴィーシュの立場のヴァフデティ」ではなく、デルヴィーシュ・ヴァフデティという名前であったと理解する方が正しい[14]。

そしてF. アフマドは、*The Young Turks*（2010, 初版1969）で1909年の「反革命」はメドレセ学生が主導する形で軍人を中心に反政府暴動が起こされたと記している。また事件で重要な役割を果たした組織として「ムスリム統一協会（the Society of Muhammed）」および機関紙『火山』の存在があり、同協会がシャリーア法およびイスラームの理念を基盤としていたことを指摘した。同書は1971年にN. ヤヴズによってトルコ語に翻訳され、出版された[15]。

S. ショウの *Reform, Revolution, and Republic: The Rise of Modern Turkey, 1808-1975*（1977）においても「反革命」はヴァフデティおよび『火山』紙が人びとを扇動したことと、彼らの要求が立憲政に基づく憲法による統治ではなくシャリーア法の権威を取り戻すことであったこととが指摘された[16]。

またL. キンロスは、*The Ottoman Centuries: The Rise and Fall of the Turkish Empire*（1977）でオスマン帝国末期におけるスルタンごとにその治世を概観している。シャリーア法の復古を求めて起こされた反乱（Mutiny）に参加した軍人を中心とした人びとが求めた政治的な真の狙いは"Down with the Constitution"および"Down with the Committee"の叫びに集約されており、要するに同事件を「反革命」と評価していることが理解される[17]。

他方でÇ. ケイデルの *State and Class in Turkey: A Study in Capitalist Development*（1987）は、あくまでも青年トルコ人の動向を記す中で1909年の「反革命」に言及しているにすぎないが、英国の同事件への介入を示唆した[18]。

1992年に英語の原典が刊行され、1998年に日本語に翻訳されたA. パーマー著・白須英子訳『オスマン帝国衰亡史（*The Decline and Fall of the Ottoman Empire*）』（1998）では、第一軍兵士と神学生（メドレセ学生）らが合流して現政権の辞職と、シャリーア法を厳格に守りスルタンの権威を尊重するイスラーム原理主義政権の樹立とを要求した、と述べられている[19]。

E. ツルヒャーは、*Turkey: A Modern History*（1993）の中で、1908年革命および統一と進歩協会に反対する立場として「自由党」勢力と保守派勢力の二つを挙げた。「反革命」は「イスラーム主義」者や保守派層によってイスラームおよびシャリーア法の回復の名の下に起こされた武装暴動であると記した[20]。

Ş. ハーニオウルは、*The Young Turks in Opposition*（1995）で、青年トルコ人革命以降の政府の体制に不満を抱いていたイスラーム法学者たるウレマー勢力が「反革命」の中で軍人へ接近したことを指摘している(21)。

後にツルヒャーの論文集 *The Young Turk Legacy and Nation Building*（2010）に収録された"The Ides of April: A Fundamentalist Uprising in Istanbul in 1909?"（1996）では、ルーミー暦の日付にのっとって「3月31日事件（31 Mart Vak'ası, 31 March Incident）」と呼ばれることが指摘された。また「原理主義者の蜂起なのか」という論文の副題からも理解できるとおりツルヒャーは「3月31日事件」を「イスラーム主義」運動の萌芽と位置づけている(22)。

そしてJ. マッカーシーは、*The Ottoman Turks: An Introductory History to 1923*（1997）および *The Ottoman Peoples and the End of Empire*（2001）で、この時代のオスマン社会の変化を受容できなかった二つの集団として、一部のムスリムつまりここではメドレセ学生と伝統的な軍人とを挙げた。この保守層を過大評価したアブデュルハミト二世は、「反革命」を導きこそしなかったものの彼らの行動を受容したことにより退位する結果となった(23)。

またL. マクフィーの *The End of Ottoman Empire: 1908-1923*（1998）では、「反革命」の発端と性格と題する節の中で、アブデュルハミト二世によって画策されたとみなされたこの出来事は「イスラーム主義」の保守派を中心に1908年革命後の体制転覆を求めたことをきっかけとして、実際には多くの研究で軍人を主体に起こされたことが主張されてきた、と指摘された(24)。

A. カンスは、*Politics in Post-Revolutionary Turkey, 1908-1913*（2000）で「3月31日事件（Event of March 31）」は旧体制の復古を望む反革命的な事件であると述べた。また先行研究では同事件を反革命とするか、クーデタとするかは意見が分かれていると指摘したが、そもそもカンスは青年トルコ人革命の革命性を主張している(25)。

ハーニオウルは、*A Brief History of the Late Ottoman Empire*（2008）では「反革命」の背景に「イスラーム主義」やウレマー勢力の影響力を示唆した(26)。

以上述べてきたように、英文研究では当初はトルコ語の研究同様に「3月31日事件」と呼ばれていたが、1960年代以降は「反革命（Counter-revolutioon）」という表記や評価が一般的になった傾向が読み取れる。また事件を性格づける要素としてヴァフデティや『火山』紙、ウレマーやメドレセ学生といった保守派層の存在が挙げられる。これは1970年代以降に高まった「イスラーム主義」の顕在化という世界的な潮流に「3月31日事件」が結びつけられたことも一つの要因と考えられる。

他方、邦文研究では当初は英文研究の流れを踏襲していたが、近年の個別分野の研究では事件参加者の多様性が着目され始めたといえる。

表5：邦文の事典・概説研究における「事件」表記（筆者作成、註27－34、71参照）

	出典	名称	評価
1	『アジア歴史辞典1』(1959)	反革命	アブデュルハミト二世の企て
2	『世界大百科事典』(1981)	反革命	アブデュルハミト二世の企て
3	『中東現代史』(1982)	3月31日事件	反革命、イスラーム原理主義
4	『イスラーム事典』(1983)	反革命暴動	立憲政治復活に対する反革命暴動
5	『平凡社大百科事典』1巻(1984)	反革命	アブデュルハミト二世退位
6	『平凡社大百科事典』8巻(1985)	3月31日事件	兵士の反乱
7	設樂國廣(1986a&b)	3月31日事件	政治の内部勢力争い
8	永田雄三(1986)	3月31日事件	「イスラーム主義」の先駆
9	『トルコ近現代史』(2001)	3月31日事件	反革命、各種の不満を利用した政治的事件
10	『世界各国史9』(2002)	3月31日事件	政治の内部勢力争い
11	『新イスラム事典』(2002)	3月31日事件	兵士の反乱
12	『岩波　イスラーム辞典』(2002)	反革命反乱3月31日事件	アブデュルハミト二世退位
		3月31日事件	保守派などによる反統一進歩団蜂起
13	設樂國廣(2016)	3月31日事件	「イスラーム主義」
14	小笠原弘幸(2018)	3月31日事件	反・統一派による蜂起、反革命

邦文の各種事典では、まず三橋冨治男『アジア歴史辞典1』「アブドゥル・ハミード2世」(1959)においてアブデュルハミト二世が1909年「反革命を準備したため両院の議決にもとづいて退位を余儀なくされた」と記された。おなじく三橋冨治男「アブデュル・ハミット2世」および「青年トルコ党」（いずれも『世界大百科事典』1巻・17巻）（1981）の中で、アブデュルハミト二世によって反革命が準備されたが叶わなかったことと、1908年から1909年の革命が「統一と進歩協会」によって起こされたこととが記された。1908年から1909年の革命と記す場合、「3月31日事件」が含まれる可能性も考えられるが、この場合は単に青年トルコ人革命を指すと考えられる。続いて黒田壽郎編『イスラーム事典』「オスマーン朝」（1983）では、「立憲政治復活を迫る青年トルコ党が革命を起こし、反革命暴動などを経たのち、アブド＝ル＝ハミト二世を退位させ」た、と記された。設樂國廣『平凡社　大百科事典』8巻「青年トルコ」（1985）では、青年トルコ人のうち「統一と進歩協会」勢力が、1909年の「兵士の反乱（3月31日事件）により一時勢力を後退

させ、反乱鎮圧により勢力を増大」させたと記された。一方で、永田雄三は『平凡社　大百科事典』1巻「アブデュルハミト二世」(1984) で、アブデュルハミト二世が第二次立憲体制の再開を認めながらも、1909年に「それに対する<反革命>を企てた疑いで退位を余儀なくされ」たと記した。設樂國廣『新イスラム事典』「青年トルコ」(2002) は先述の『平凡社大百科事典』と同じ内容が記された。そして小松香織『岩波イスラーム辞典』「アブデュルハミト二世」(2002) では、アブデュルハミト二世が 1908 年の青年トルコ人革命によって立憲体制の復活を認めながらも、「翌年、反革命反乱3月31日事件に関与したとして退位させられた」と記された。設樂國廣『岩波イスラーム辞典』「第2次立憲制 (オスマン朝)」および「統一進歩団」(2002) では、1909年に「統一進歩団の強引な活動に反発する軍の一部と宗教勢力」つまり「保守派などによる反統一進歩団蜂起である3月31日事件」が起こされたと述べられた[27]。

続いて概説書では次のとおりである。永田雄三『中東現代史』(1982) では「3月31日事件」は青年トルコ人革命の「反革命」という位置づけにあり、西欧的なものを排除し、イスラームの原理に基づく宗教運動であったと指摘している。ただし、同事件があってこそ君主の交代が成立したことを受け、青年トルコ人革命をより一層促進したとも述べている[28]。これに対して設樂國廣 (1986a) は、統一と進歩協会の政策に多くのムスリムが不満を抱き、一方でイスタンブルに駐屯する兵士らもまた日常に不満を抱えていた。「3月31日事件」は、下層ウレマーたちからの受け売りによって「シャリーアを要求する」というスローガンを掲げたイスタンブル駐屯の狙撃大隊の兵士たちによって起こされた蜂起であるが、兵士らは議会と憲法を否定していたわけではない、と述べた。永田 (1986) は、設樂のこの論稿 (1986a) に対し、同事件は「『ムスリム連合〔筆者注：ムスリム統一協会のこと〕』のイデオロギー的指導のもとに」、統一と進歩協会寄りの「青年将校とたたきあげの下士官たちとの対立、都市下層民の不満などをバネとして展開されたトルコにおける『イスラム復興運動』の先駆」であると理解しているが、設樂は「この運動の背後におけるイスラミズムの潮流には全く言及していない」とコメントした。この指摘を受け設樂(1986b) は、統一と進歩協会の非ムスリム的な行動に対して異議を唱えるために「シャリーアの要求」というスローガンを掲げたのであり、「革命推進派の西欧化政策そのものに反対するイスラム主義のみによっておこされたものではな」く、「根本的には、青年トルコ人革命における、内部の勢力争いのひとつである」と永田の意見を真っ向から否定した[29]。一連の議論の末に永田は『西アジアII：イラン・トルコ』(2002) において、「3月31日事件」における「イスラーム主義」の要素に言及しながらも、事件の本質は統一と進歩協会の内部権力争いであり、協会内の多数派・中央集権派への反発であった、とまとめた[30]。永田、設樂両氏の一連の議論は「3月31日事件」研究における一番の問題点である。同事件を起こしたのは誰で、目的は何であったのか、という未解明の部分が浮き彫りになるやり取りであった。邦文で最も「3月31日事件」が研究、議論された

のはこの瞬間であったといえる。そして新井政美は『トルコ近現代史』(2001) の中で「3月31日事件」はオスマン自由党が『火山』紙を支持していた軍人やメドレセ学生を利用する形で蜂起を画策したが、最終的には自由党の思惑から外れ、「シャリーアの復活」が叫ばれるまでにいたったと指摘した[31]。『帝国主義と各地の抵抗 II（世界史史料 9)』(2008) では、吉澤誠一郎「125　青年トルコ革命への関心（1910)」(第11節　辛亥革命）のなかで、胡漢民の論説「トルコ革命の機会に我が国軍人に告ぐ（就土耳古革命告我国軍人)」(1910) が紹介されている。1909年4月に起こった軍の変乱をスルタンが利用して、前年の革命で名を成した者らを一掃した。しかしながら派遣された革命派が変乱を鎮圧し、守旧派の措置は変更され、スルタンも廃位された。「あの圧政の君主が、爵位や報奨を餌にしたり刑罰で脅したりするに比べて」統一と進歩協会が革命を宣伝するための新聞・書物のみで、軍人の天性を促し、旧体制と新体制のどちらに就くべきか選ばせたことの違いは明白であると指摘されている[32]。新井の『イスラームと近代化』(2013) では「反革命」が「宗教的反動」によって起こされ、その中核に『火山』紙が存在したというかつての評価は再検討されるべきであり、参加者の雑多さを見ても単純な事件ではなかったと指摘している[33]。また最新の概説書として小笠原弘幸の『オスマン帝国：繁栄と衰亡の600年史』(2018) では、「3月31日事件」は兵卒上がりの軍人やメドレセ学生を中心とする反統一派（統一と進歩協会支持者の総称）によって起こされた「反革命」であると述べた[34]。

以上をまとめると、英文研究と比較すると事件の根底にある政治的対立や事件を起こした軍人にも焦点があてられてきた傾向があるが、永田（1986）が設樂（1986a）に指摘したように、事件の背後にあるイスラミズムの潮流は無視できるものではない。しかしながらこれまで指摘されてきた「イスラーム主義」とはいかなる性質のものだったのか、同事件との関連性への言及はなく、宗教の観点からも客観的に評価が下されることが必要になる。

（2）「3月31日事件」の専論

「3月31日事件」というタイトルが付された専論はトルコ語では多数刊行されてきたが、英文および邦文研究では管見の限りその存在は確認できない。

最も古い「3月31日事件」の専論はR. アルペルの学位論文『3月31日事件（*31 Mart Vak'ası*)』(1944) である。同論文の主要史料は同時代の各種新聞と回想録である。新聞は統一と進歩協会の機関紙ともいえる『イクダム（*İkdam*)』紙および『タニン（*Tanin*)』紙が中心で、反対派の立場をとっていた『火山』紙、『ミザン』紙、そして『自由（*Serbesti*)』紙も数回だが参照されている。回想録は『タニン』紙を創刊した人物の一人であるヒュセイン・ジャーヒト（Hüseyin Cahit, 生没 1874-1957)、『自由』紙の執筆者メヴランザーデ・リファト（Mevlanzade Rifat, 生没 1869-1930) という同時代人のほか、共和国期の政治家でもあるユースフ・ヒクメト・バユル（Yusuf Hikmet

Bayur, 生没 1891-1980）などである。「3 月 31 日事件」に至る背景と当日の流れを時系列に沿って記し、事件の概要を明らかにしているが、結論として事件が誰によってどのように起こされたのかは明らかにできていない、と締めくくられている(35)。

次に M. バイダルの『3 月 31 日事件（*31 Mart Vakası*）』（1955）が挙げられる。前述のアルペルの研究のほか、回想録や同時代の新聞を史料としており、事件発生の過程から事件後の処罰に至るまで簡潔に記されている(36)。

そして F. ウナト編纂の『第二次立憲政の宣言と 3 月 31 日事件（*II. Meşrutiyet İlanı ve 31 Mart Olayı*）』ではアリ・ジェヴァト（Ali Cevat, 生没 1856-1930）の回想録を典拠史料にオスマン帝国『官報（*Takvim-i Vekayi*）』などで情報を補足しながら、青年トルコ人革命からアブデュルハミト二世の退位までを年表としてまとめ、なおかつ事件前後の詳細を記している(37)。

さらに İ. ダニシュメンドの 1961 年初版『大宰相テヴフィク・パシャの記録における公的・私的書類からみる：3 月 31 日事件（*Sadr-ı-a'zam Tevfik Paşa'nın Dosyasındaki Resmi ve Hususi Vesikalara Göre :31 Mart Vak'ası*）』（1986）がある。四度にわたり大宰相を務めたテヴフィク・パシャの公的な書類のほか個人的な手紙などの史料を元に、事件後の政府および軍の動向を明らかにした研究であり、冒頭より一貫してアブデュルハミト二世の事件への関与を否定している(38)。

つづいて「3 月 31 日事件」研究の基本文献として、現在に至るまで最も参照されているのが 1967 年の学位論文を元に刊行された S. アクシンの『3 月 31 日事件（*31 Mart Olayı*）』（1970）である。『タニン』、『イクダム』、そして『火山』などの同時代の新聞、上下院議会議事録、内務省・外務省・陸海軍などのオスマン語文書史料、そして回想録という幅広い史料を使用している。事件の全貌を明らかにし、なおかつ事件の中で重要な役割を果たした人びとやキーワード、例えば軍人、ウレマー、反対勢力、そして議会や諸外国などの項目に分けてその立場を分析している。結論として事件が誰によって起こされたのかは明言を避けた(39)。

英国との繋がりに着目した研究として D. アヴジュオウルの『3 月 31 日事件における外国の手先（*31 Martta Yabancı Parmağı*）』（1969）が挙げられる。英文および仏文研究、そしてトルコ語の回想録を史料に、先行研究がまとめられている。事件首謀者といわれたデルヴィーシュ・ヴァフデティがキプロス出身であることから彼が組織したムスリム統一協会も外国由来の思想を持った組織であると述べ、事件後から本書刊行の 1969 年に至るまで、「イスラーム主義」を語る際に「3 月 31 日事件」が引き合いに出されることを指摘している。「3 月 31 日事件」の存在が現代の共和国の発展の妨げとならぬよう史料の内容がより精査されるべきであるし、「アタテュルクの世俗主義政治が復古されるべきだ」と述べた(40)。

また『反動の小史（*İrtica'ın Tarihçesi*）』と名付けられたシリーズの一冊目として初版が 1987 年に刊行された S. アルバイラクの『3 月 31 日（事件）は保守的な運動か？(*31 Mart Gerici bir Hareket*

mi?)』(2015) は、その名のとおり、「3月31日事件」の「イスラーム主義」反動運動という側面に焦点をあてた一冊である。首謀者といわれたヴァフデティの言動を『火山』紙を史料として分析しているが、そもそもヴァフデティに関する史料が『火山』紙以外に存在しないという問題点があり、客観性に欠ける(41)。

1996年初版 B. ウルゲンジ『メヴランザーデ・リファト：3月31日のとある革命の逸話 (*Mevlanzade Rifat 31 Mart bir İhtilalin Hikayesi*)』(2010) は、1912年に出版されたM. リファトの回想録を再編した研究である。各先行研究で参照されていたリファトの回想録の元となった小論「オスマンの革命から一葉、あるいは1325年Mart月31日の反乱 (*İnkılab-ı Osmaniden Bir Yaprak yahud 31 Mart 1325 Kıyamı*)」と考えられる(42)。

K. バイラムとM. ウナル編纂による、アブデュルハミト二世退位後に即位したスルタン・メフメト五世時代から帝国の滅亡まで、最後の修史官を務めたアブドゥルラフマン・シェレフ (Abdurrahman Şeref, 生没 1853-1925, 在任 1909-1922) の回想録『最後の修史官アブドゥルラフマン・シェレフ・エフェンディの歴史：第二次立憲政の出来事 (1908-1909) (*Son Vak'anüvis Abdurrahman Şeref Efendi Tarihi; II. Meşrutiyet Olayları(1908-1909)*)』は事件後の結末を明らかにする重要な研究の一つであり、史料でもある。「3月31日事件」は「行動軍」に鎮圧され、戒厳令下の軍事法廷で事件首謀者といわれたデルヴィーシュ・ヴァフデティらは裁かれた。その裁判史料はこれまで刊行されておらず、本書で初めて公にされた(43)。

O. コジャハンオウルの『3月31日謀反とスルタン・アブデュルハミト (*31 Mart Ayaklanması ve Sultan Abdülhamid*)』(2009) では『火山』紙や議会の記録を典拠史料に事件を体系的にまとめている。そして本書のタイトルどおりアブデュルハミト二世に焦点をあて、退位からその後の逃亡に至るまでを記している。ただし議会議事録などを史料としているためスルタンを退位させた側からの視点で記された研究といえる(44)。

T. アルプアスランの『3月31日謀反：100年で何が変化したか？ (*31 Mart Ayaklanması: Yüz Yılda Ne Değişti?*)』(2015、初版2009) は、出典にオスマン語史料は記されておらず、回想録および既存の研究のまとめという性質の一冊である。事件を鎮圧した「行動軍」に関しては先遣隊として鎮圧に加わったケマル・アタテュルクの記述を元にしている(45)。

近年の体系的な研究として、N. アルカンの『テッサロニキ駐屯軍、イスタンブルへ進軍：3月31日事件とアブデュルハミト二世の退位 (*Selanik İstanbul'a Karşı; 31 Mart Vak'ası ve II. Abdülhamid'in Tahttan İndirilmesi*)』(2011) が挙げられる。テッサロニキはオスマン帝国第三軍の駐屯地であり、統一と進歩協会所属の軍人が多数在籍していた。「3月31日事件」鎮圧のために派遣された後の「行動軍」もこのテッサロニキの第三軍から組織および派遣された。そのため統一と進歩協会に主眼が置かれた研究であることは間違いないが、軍事面だけではなく、政治、教

育、宗教、そして外国にも視野を広げて事件の評価を考察しており、各研究を紹介した研究史の要素もある[46]。

H. ババジャンと S. アヴシャル編纂のマヒル・サイド・ペキメン（Mahir Said Pekmen, 生没 1880-1949）の回想録『3 月 31 日事件の回想：反乱の日々における敵対勢力（*31 Mart Hatıraları İsyan Günlerinde bir Muhalif*）』(2013) では、「3 月 31 日事件」当日の詳細が記されている。ペキメンは、「3 月 31 日事件」を反動運動と評価することには懐疑的である。なぜならアブデュルハミト二世時代が必ずしも復古を求めるような喜ばしい時代ではなく、またこの種の不満は遅かれ早かれ出現していた。また事件発生に至る重要な要因は統一と進歩協会に関するするものであった、と述べた[47]。

さいごに S. ユルドゥズの学位論文（2006）を元に刊行された『3 月 31 日反乱：秘密を保持した反乱…発生から鎮圧に至るまで（*31 Mart İsyanı: Gizemini Koruyan bir İsyan...Çıkışından Bastırılmasına Kadar*）』(2017) は、最新の「3 月 31 日事件」研究の一つといえる。「3 月 31 日事件」は発生の点でみれば、オスマン史上のほかの反乱と特別異なるものではなかった。そして結論としては、統一と進歩協会にとって目の上のたんこぶであったスルタン・アブデュルハミト二世や反対派を一掃することができたが、事件が誰によって起こされたのかという点を明らかにするためには、いまだ公にされていない統一と進歩協会に関する史料などが明らかにされる必要がある、つまりは現時点では解明が難しいと指摘した[48]。

（3）政治問題

以上、これまでの研究史を整理してきたことで明らかなように、「3 月 31 日事件」はさまざまな人びとが関わっていたためにその原因も断定することが難しい状況にあり、また本質を見えにくくする恐れがある。各専論でも指摘されてきたように、同事件が発生する要因として、根底に政治的対立が存在していたことは確かである。対立の源をたどると青年トルコ人内部の派閥争いが指摘でき、それは 1902 年に開催された第一回青年トルコ人パリ会議までさかのぼることになる。青年トルコ人に関する研究は *DİA* の「青年トルコ人（Jön Türkler）」(2001) や「統一と進歩協会（İttihat ve Terakki）」(2001) の項目をはじめ、「3 月 31 日事件」以上に議論されてきた問題である。ここでいう青年トルコ人とは、オスマン憲政の復活を望む陸軍士官学校や軍医学校卒業生をはじめとする若きオスマン知識人の総称であり、統一と進歩協会はその中の一組織である。例えば後述するアフメト・ルザ（Ahmet Rıza, 生没 1858-1930）やプレンス・サバハッティン（Prens Sabahattin, 生没 1879-1948）は、元は同じ青年トルコ人として、憲法復活という志を共にする仲間であった。ただし、サバハッティンは統一と進歩協会所属ではなく、オスマン自由党所属である。また『ミザン』紙の主筆ミザンジュ・ムラト（Mizancı Murad, 生没 1854-1917）も代表的な青年ト

ルコ人の一人であるが、統一と進歩協会に反対する立場の代表ともいえる[49]。

T. トゥナヤの『トルコにおける政党 1859-1952（*Türkiye'de Siyasi Partiler, 1859-1952*）』（1952）は、その名のとおりオスマン帝国からトルコ共和国に至るまでの政党に関する研究であり、あくまで政党の一つとして統一と進歩協会はもちろん、事件首謀者といわれたデルヴィーシュ・ヴァフデティが組織した「ムスリム統一協会」および機関紙の『火山』紙に言及している。トゥナヤは「ムスリム統一協会」を「イスラーム主義」組織であると評価している[50]。

さて「3月31日事件」に至る過程に関しては、例えば邦文研究では設樂國廣の研究（1976, 1978, 1979）が挙げられる。統一と進歩協会は二つの派閥に分類され、一つはアフメト・ルザ率いる「中央集権派（Merkeziyetçi）」、そしてもう一つがプレンス・サバハッティン率いる「地方分権派（Adem-i Merkeziyetçi）」である。前者がオスマン人の団結を求めたことに対して、後者が非トルコ系の人びととも協力関係を持つことを受け入れたため、前者は自らを「干渉排除派（Adem-i Müdahaleci）」と呼び、後者を「干渉容認派（Müdahaleci）」と断じた。この中央集権派に属し、オスマン帝国第三軍所属アフメット・ニヤーズィ（Ahmed Niyazi）少佐が軍事蜂起し、青年トルコ人革命が起こされた[51]

ニヤーズィを含めた青年トルコ人革命を起こした統一と進歩協会の中核を担うメンバーはその多くが士官学校や軍医学校出身の若者であり、革命後の政権を掌握できる権力を有していなかった。革命後も前時代の政治家が政権を担当する結果になったというのは設樂（1979）のほかKANSU（1997）、新井（2001）、AHMAD（2010）などでも指摘されてきたことである[52]。

このような状況下で、地方分権派から分離した中央集権派が組織した「自由党」が事件を画策し、政権奪取を狙って起こされた事件であるという指摘もある。例えばこの問題に関してアクシンの『青年トルコ人と統一と進歩（*Jön Türkler ve İttihat ve Terakki*）』（1998、初版1987）では、プレンス・サバハッティンの小論やメヴランザーデ・リファトの回想録（2010、原典は1912年）を代表的な見解として挙げた。リファトは、「3月31日事件」はサバハッティンとリファトを含む統一と進歩協会の反対派による事件であると述べたが、サバハッティン自身はあくまで事件で役割を果たした出版業界と関係があったにすぎず、中心となって事件を画策したわけではないと否定した。そして事件首謀者といわれたヴァフデティは事件後に行われた事情聴取で、「3月31日事件」は複合的かつ雑多な事件などではなく、一政党の争いによって起こされた、とヴァフデティ自身の関与と政治問題以外の事件発生要因を否定したと、アクシンは指摘した[53]。ヴァフデティ自身の同事件に対する評価や見解は事件後の事情聴取からしか情報を得ることはできず、史料の偏りが指摘できる。

M. ドゥルドゥの論文「オスマン帝国における青年トルコ人運動の始まりとその影響（Osmanlı Devleti'nde Jön Türk Hareketlerine Başlaması ve Etkileri）」（2003）は青年トルコ人組織の変遷や派閥

の問題をまとめた研究である。統一と進歩協会の反対派の筆頭はサバハッティンとムラトであり、西洋諸国すらも反対派に同調していたことを示唆しながらも、「3 月 31 日事件」との直接的な関わりについては言及していない。しかしながら「3 月 31 日事件」の余波は統一と進歩協会が一身に受けることになった、とまとめた(54)。

しかしながら藤波伸嘉の『オスマン帝国と立憲政：青年トルコ革命における政治、宗教、共同体』(2011) の中では、中央集権派と地方分権派の対立という統一と進歩協会内部の派閥争いに関するサバハッティンの「思想を扱う研究の多くは、革命以前の言動の分析を主眼とする傾向にある」と述べた。またサバハッティン率いる自由党は 1908 年 12 月のオスマン帝国議会議員選挙で一議席しか獲得できておらず、政府内の与野党対立や、派閥争いというにはその前提が成り立たないことを指摘した (55)。

藤波（2011）の指摘は確かにそのとおりだといえるが、青年トルコ人と呼ばれる人びとの間に派閥争いや対立があったことは確かである。その中でも特に統一と進歩協会所属の政治家や将校らの間にも意見の対立が存在した。しかしそれが「3 月 31 日事件」の直接的な原因となり得たかは検討の余地がある。

M. トゥルファンの *Rise of the Young Turks*（2000）は 2003 年にトルコ語に翻訳、出版された。トゥルファンは「3 月 31 日事件」の直接的な原因を 1909 年 4 月 6 日に殺害された『自由』紙執筆者ハサン・フェフミの事件としているが、背後には統一と進歩協会への反対勢力の存在があったと指摘している(56)。

キャーズム・カラベキル（Kazım Karabekir, 生没 1882-1948）の回想録『統一と進歩協会（*İttihat ve Terakki Cemiyeti*）』（2009）では、カラベキル自身が「3 月 31 日事件」の鎮圧部隊「行動軍」の一員であったことから、部隊の動向が記されている。事件のきっかけとしてのフェフミ殺害事件に対する新聞各紙におけるメドレセ学生や軍人の反応を記し、「3 月 31 日事件」は立憲政に反対する者たちによる反乱であると述べた(57)。

そして H. ウナルの論文“Britain and Ottoman Domestic Politics: From the Young Turk Revolution to the Counter-Revolution, 1908-9”（2001）では、主にオスマン帝国と英国の外交関係を中心に論じられており、青年トルコ人革命および「反革命」が両国の関係を変化させる分水嶺となったことは間違いなく、「反革命」をきっかけに英国との蜜月関係が終わりを迎えることとなったと指摘された(58)。

アルメニア人問題やアダナ事件の研究である佐原徹哉の『中東民族問題の起源：オスマン帝国とアルメニア人』(2014) のなかでも「3 月 31 日事件」について言及されている。佐原曰く、アダナ事件は保守派の反革命クーデタ「3 月 31 日事件」の翌日 1909 年 4 月 14 日に発生したため、連動して画策して起こされたという陰謀説があるが、そうであるとすれば両事件の黒幕が同じで

なくてはならない。スルタン、新政府、統一と進歩協会、サバハッティンなど「3月31日事件」で主犯と目された人びとにはアダナ事件を起こすような、つまりアルメニア人と敵対する動機がない、と両事件の関係が否定されている。いずれにせよアダナ事件は「3月31日事件」の翌日に起こったため、政府が機能不全に陥っており、虐殺が拡大したと指摘した(59)。

以上のことから、「反革命」や「反対派」といった場合に、何に対して反対しているのかを分類する必要がある。例としてトゥルファンとカラベキルの見解は同じように見えて、反発している対象が異なる。統一と進歩協会への反対派なのか、立憲政への反対派なのかで事件の本質は大きく意味が変わる。すなわち「3月31日事件」は、前者の場合は政治的な反発といえるが、後者の場合は英文研究でたびたびいわれてきた「反革命」という意味合いの事件になる。

（4）軍事問題

既に述べてきたように「3月31日事件」は「イスラーム主義」の要素がありながらも、軍事反乱であるという評価が一般的である。事件を決起したのはイスタンブルのタクスィム広場裏手に位置していたタシュクシュラ兵舎の第四狙撃部隊であるが、そもそも軍人らが暴動を起こすきっかけとなったのは、軍内部の再編に異議を唱えたからであった。先行研究では、事件を起こした軍人の動向と事件を鎮圧した「行動軍」に焦点をあてたものが多数みられる(60)。

A. B. クランの『我らがトルコ人革命の歴史と「青年トルコ人」（*Türk İnkılap Tarihimiz ve "Jön Türkler"*）』（1945）では「3月31日事件」について、当初はその真相が明らかにされなかったと述べた。同事件は、統一と進歩協会に対する反動（Aksülamel）という認識をされることが多く、またそれは事実だといえるが、この反抗を実際に起こしたのは憲法と立憲政の擁護者としてルメリから送られた狙撃部隊（Avcı Taburları）であると述べた(61)。

V. スウェンソンの論文"The Military Rising in Istanbul 1909"（1970）では、かねてより「3月31日事件」はトルコ人研究者によって陰謀説、つまり「イスラーム主義」やスルタンの扇動説がささやかれてきたが、1909年にイスタンブルで起こった軍事反乱という評価をしている。1908年の青年トルコ人「革命」に続く「反革命」という一連の流れは認めながらも、スルタンが扇動した立憲政に対する「反革命」と評することは想像力が欠如していると指摘された(62)。

A. アルカンの『第二次立憲政期における軍と政治（*İkinci Meşrutiyet Devrinde Ordu ve Siyaset*）』（1992）では「3月31日事件」は一介の軍人によって起こされた蜂起が人びとの注目を浴び、そして事件の結末も再び軍人によって幕が閉じられたと述べた(63)。

O. コジャハンオウル編纂のスレイマン・カーニー・イルテム（Süleyman Kani İrtem, 生没 1875-1945）の回想録『3月31日反乱と行動軍：アブデュルハミトのテッサロニキ追放（*31 Mart İsyanı ve Hareket Ordusu: Abdülhamid'in Selânik Sürgünü*）』（2003）においても、「3月31日事件」を起こ

した狙撃部隊と事件を鎮圧した「行動軍」およびマフムート・シェヴケト・パシャ（Mahmut Şevket Paşa, 生没 1856-1913）に焦点をあて、同事件は軍人によって起こされ軍人によって鎮圧された事件であるとまとめられた(64)。

邦文研究では設樂國廣の「青年トルコ人とオスマン朝軍：将校の出自に関する問題を中心に」（1981）や「行動軍の指導理念の変化」（1983）が挙げられる。「3 月 31 日事件」が発生する直前に軍内部の配置替えが行われ、それに伴い軍人の一斉解雇が行われた。この時に「叩き上げ将校」がおもに解雇の対象とされたことを受け、軍人はこの決定を下した陸軍省へ不満を抱いたとされる(65)。

既述の *TCTA* の「軍および治安（Ordu ve Güvenlik）」（1985）の中でも、統一と進歩協会の政策によって叩き上げ将校が 1400 人退役させられたことが記されている。ただし実際に事件で蜂起したのは狙撃部隊である。*DİA* の「叩き上げ将校（Alaylı）」（1989）の項目においても、叩き上げの将校らが「3 月 31 日事件」で重要な役割を果たしたと記されている(66)。

A. オルメズは博士論文「ガーズィ・エトヘム・パシャの軍事的および政治的な生涯（1844-1909）（Gazi Ethem Paşa'nın Askeri ve Siyasi Hayatı (1844-1909)）」（2004）の中で「3 月 31 日事件」で重要な役割を果たした叩き上げ将校らが、青年トルコ人革命後に解雇されたこととその原因の一つとして叩き上げ将校らの識字率の低さを指摘した。また小論「近代化の時代におけるオスマン軍の権力による試験（Modernleşme Çağında Osmanlı Askerinin 'İktidar'la İmtihanı）」（2017）では、「3 月 31 日事件」以前より存在していた叩き上げ将校と士官学校出身将校の対立が、事件を経てもなお存在し続けたと指摘した。そして『叩き上げ将校と士官学校出身将校（Alaylılar ve Mektepliler）』（2017）では、前論文の内容を踏まえ、同事件における両将校らの対立に言及した(67)。

T. アスランの論文「3 月 31 日紛争のために諸地方で起こった出来事に対して行われた措置と軍事的行動に関する研究（31 Mart Hadisesi Üzerine Vilayetlerde Çıkan Olaylar Karşısında Alınan Tedbirlere ve Askerî Faaliyetlere Dair Yazışmalar）」（2010）は「3 月 31 日事件」後の帝国内の情勢に関する研究である。「3 月 31 日事件」は軍事的な蜂起であるという見方をされており、また地方の市民はイスタンブルでの詳細を知らなかったともいえるが、鎮圧部隊「行動軍」が所属していたルメリ地域では部隊への参加を求める市民もいた、というほどである(68)。

S. ゼイレッキと H. アクマンの共著論文「3 月 31 日事件がオスマン軍に与えた影響（31 Mart İsyanının Osmanlı Ordusu Üzerindeki Etkileri）」（2014）は 1908 年の青年トルコ人革命から 1912 年までの第二次立憲政の前半期において、「3 月 31 日事件」が軍に対していかなる影響を与えたのかが記されている。主な史料な帝国下院議会議事録（Meclis-i Mebusan Zabıt Ceridesi）である。軍から多くの叩き上げ将校が除隊させられ、その数は第一軍所属の除隊者だけで 1400 人にのぼった。「3 月 31 日事件」への関わりが疑わしきものは皆捕らえられ、その結果第一軍の軍人らは逮

捕か、除隊か、地方の駐屯地にバラバラに飛ばされるかの三つの選択肢しかなく、事実上第一軍が消滅したと締めくくられた(69)。

地方の事例を挙げた研究としてO. ボザンの論文「3月31日事件の地方における反応：ディヤルバクルの事例（31 Mart Olayının Taşradaki Yanıkları: Diyarbakır Örneği）」（2014）がある。「3月31日事件」研究はおもに事件が発生したイスタンブル中心に限定されていることが多く、本論文は地方の事例としてディヤルバクルからいかなる手紙や電報が送られ、また反乱行動が起こされたのか、そして反乱行動の結果としてディヤルバクル住民たちも首謀者といわれたヴァフデティと同様に軍事法廷（軍法会議）で裁かれたことが明らかにされた。またディヤルバクルは、ヴァフデティが1908年の青年トルコ人革命の恩赦を受けるまでの数年間流刑に処されていた場所である(70)。このように、「3月31日事件」が決してイスタンブルに限定された事件ではなかったことが分かる。

設樂國廣の『ケマル・アタテュルク：トルコ国民の父（世界史リブレット人86）』（2016）では、後のトルコ共和国建国者であり初代大統領ケマル・アタテュルクが「3月31日事件」鎮圧部隊の参謀を務めた。設樂の各研究（設樂 1976a, 1978, 1981, 1983など）を元に、読み書きが苦手な叩き上げ将校を解雇してその穴埋めにメドレセ学生の徴兵が求められたことと、これをきっかけに叩き上げ将校を中心に下士官らによって「3月31日事件」が起こされたこととを述べた。鎮圧部隊結成時に「行動軍」と名付けたのはケマル・アタテュルクである(71)。

ここで重要となるのは叩き上げ将校対、士官学校出身将校という将校らの出自による内部対立が事件の根幹に存在する点と、クラン（1945）や設樂（1981）が述べた立憲政および憲法保護のための部隊が「3月31日事件」を起こす中心であったため、事件参加者が決して立憲政に対する「反革命」を意図して起こしたのではなかったと評価できる点である。

（5）宗教・教育問題

まず「イスラーム主義」に関する研究として、*DİA*の「3月31日事件」および「ムスリム統一協会」の項目執筆者でもあるA. オズジャン著『パン・イスラーム主義：オスマン帝国、インド・ムスリムと英国（1877-1924）（*Pan-İslamizm Osmanlı Devleti Hindistan Müslümanları ve İngiltere (1877-1924)*）』（1997）が挙げられる。同事件は、新政府および各種の政策に不満を抱いた人びとによって起こされた事件で、結果としてスルタン・アブデュルハミト二世を退位へと追い込んだと述べた。この反対の立場をとる人びとの中に「イスラーム主義」勢力の存在を挙げた(72)。

オスマン帝国では1846年に抽選式の徴兵が採用され、一部の例外を除き、帝国臣民の健康な男子は抽選によって兵役に向かうことが義務付けられた。それと同時に、メドレセ学生に対して試験を課すことが決定され、試験に通過すれば徴兵を免除される、つまり例外待遇を受けられた。

兵役に関する諸規則は幾度か改正され、アブデュルハミト二世即位後の 1892 年の改正時にはメドレセ学生へ課されていた試験が全面廃止された。これに伴い、メドレセに通ってさえいれば学生は兵役を免除される、いわば完全なる特権階級となったといえる(73)。

M. エルギュンの論文「第二次立憲政期のメドレセの状況と改革の動き（II. Meşrutiyet Döneminde Medreselerin Durumu ve Islah Çalışmaları」（1982）では、「3 月 31 日事件」が起こる前に徴兵免除試験が段階的に開始されたことが記されている。また事件から 2 日後の 1909 年 4 月 15 日に筆者不明の文章にて、アブデュルハミト二世はメドレセ状況改善のために一万リラを寄付したというものが公表された。後からこの記事が誤報だったことが明らかにされたが、「3 月 31 日事件」をアブデュルハミト二世が指示した、という説を補強する内容だといえる。事件にメドレセ学生らが加わったことを受け、事件鎮圧後、「行動軍」司令官マフムート・シェヴケト・パシャによる戒厳令下で、メドレセ学生の所在や授業、試験への出欠までも軍が管理したと指摘した(74)。

メドレセ学生と徴兵免除試験については、秋葉淳の研究（1996, 1998）が挙げられる。既述のとおり、メドレセ学生はメドレセに通ってさえいれば兵役を免れることが出来たため、平時は家で農作業を行い、徴兵の時だけメドレセへ通う者もいたという。学生数が膨れ上がったことにより住環境が悪化し、学生の学力的質の低下も問題視されており、ついにはメドレセが「兵役逃れの避難所」となっていたことを指摘した(75)。

そして A. ベインの論文“Politics, Military Conscription and Religious Education in the Late Ottoman Empire”（2006）はアブデュルハミト二世時代から第二次立憲政期（1908-1918）に至るまでの構造、政策の面でのメドレセの詳細が記されている。大きな転換点の一つとして 1892 年のメドレセ学生に課されていた徴兵免除試験の廃止、つまり無試験かつ無条件で兵役が免除されるこの決定が挙げられた。この改革を含め、アブデュルハミト二世期がメドレセの停滞を招き、結果として 1909 年の「反革命」に学生らが加わったことにより、「反革命」以降、統一と進歩協会がメドレセを縮小することになったと指摘した(76)。

藤波（2011）の研究によれば、メドレセ学生同様に徴兵が免除されていたギリシャ正教徒が「3 月 31 日事件」後の徴兵法令の改正によってムスリムと非ムスリムの平等の観点から等しく徴兵されることが決められた。藤波はオスマン政府と総主教座の間で行われた軍事、教育に至るさまざまな分野での覇権争いの詳細を明らかにした(77)。

S. グナスティの“The Late Ottoman Ulema’s Constitutionalism”（2016）は、立憲政期におけるウレマーの役割が主題として論じられている。青年トルコ人革命後の統一と進歩協会による新たな政策とそれに伴い地位や権利を奪われることを恐れたメドレセ学生や下位のウレマーが軍人に加わったことと、一方で高位のウレマー層の事件への関与は見られなかったことが指摘された。しかしながらメドレセやウレマー制度は改革の実施を余儀なくされた(78)。

軍事の問題でも述べたように、「3月31日事件」研究は発生したイスタンブル以外の地方の様子については注視されてこなかった。例えばT. アスランの論文（2010）のほかには、Ş. ジョシャルの修士論文『3月31日事件へのウレマーの見解（*31 Mart Vakasına Ulemanın Bakışı*）』（2018）が挙げられる。主たる史料は帝国下院議会議事録（Meclis-i Mebusan Zabıt Ceridesi）である。各地からイスタンブルへ送られてきた報告書やウレマーからの手紙が帝国下院議会で読み上げられ、地方の状況が伝えられた。これらの報告書を裏づける公的な文書が参照されておらず、地方の実情が完全に解明されたとはいえないが、ジョシャルは、ウレマーが「3月31日事件」を支持してはいなかったと結論付けた(79)。

改めて「3月31日事件」が多分野で諸地方へも影響を及ぼしていたことが明らかとなった。ただし地方の事例を取り上げた研究の不足が指摘できる。また「イスラーム主義」による事件という評価に反して、ウレマーが必ずしも積極的に事件へ関与していたわけではなかったことも明らかにされたが、下位ウレマーやメドレセ学生の問題を明らかにすることが課題として残された。

（6）出版・新聞

「3月31日事件」の首謀者といわれたデルヴィーシュ・ヴァフデティが『火山』という新聞を発行し、新聞を媒体に人びとを先導したといわれてきたため、出版に関する研究も盛んに行われてきた。

まずV. ギュンヨルの「定期刊行物（Matbuat）」（*İA*, 1972）およびO. コルオウルの「出版（Basın）」（*TCTA*, 1985）の各項目によれば、1908年の青年トルコ人革命によって出版・言論の規制が緩和され、最初の二か月間で200紙以上が出版認可を与えられ、1908年から1909年の一年間で「3月31日事件」の影響を受けながらも353点もの新聞・雑誌が出版された。また「3月31日事件」直前に『自由』紙の執筆者ハサン・フェフミが暗殺されたこと、事件のさなかで『タニン』紙の主筆ヒュセイン・ジャーヒトと思われる人物が殺害されたが、当の本人はすでに逃亡していたこと、最後に事件を先導した者の一人として『火山』紙出版認可所有者ヴァフデティが処刑されたことが記されている(80)。

「3月31日事件」の専論ではなくあくまで回想録という扱いになるが、トルコ共和国第三代大統領を務めたジェラル・バヤル（Celal Bayar, 生没1883-1986, 在任1950-60）の回想録『私も書いた（*Ben de Yazdım*）』（全8巻）のうち1巻および2巻（1965, 1966）ではヴァフデティや『火山』紙について記されている。1909年当時、ジズレ（現在のシュルナク県）で知事を務めていたカドリ・ウチョク（Kadri Uçok, 生没1881-1958）の回想録などを史料として裁判前の事情聴取、判決の詳細を記しているが、全ての史料の出典が記されているわけではなく、原典は未確認である(81)。

またヴァフデティおよび『火山』紙に関する研究は、E. ドゥズダーの『火山』紙現代トルコ語

転写版（1992）が重要な研究であり史料として挙げられる。ドゥズダーの研究はほかに『第二次立憲政期における出版と政治（*İkinci Meşrutiyet Devrinde Basın ve Siyaset*）』（2010）に収録された小論「火山：1908-1909年に出版された宗教的・政治的な日刊紙（1908-1909 Yıllarında Yayınlanan Dini Siyasi Günlük Gazete）」や*DİA*の「火山紙（Volkan）」（2013）の項目が挙げられる。最も詳細な『火山』紙の研究といえるが、『火山』紙を分析する史料が当の『火山』紙に限られるため、客観的な評価が欠落している(82)。『火山』紙の出版責任者であった「デルヴィーシュ・ヴァフデティ（Derviş Vahdeti）」（1994）および同紙が機関紙となった「ムスリム統一協会（İttihad-ı Muhammedi Cemiyeti）」（2001）については*DİA*の各項目で詳細が記されている。同協会はその名のとおり、当初はイスラームの統一を掲げて組織されたが、数ある政治組織の一つであると評価されている(83)。このほかO. コジャハンオウルの『デルヴィーシュ・ヴァフデティと下士官たちの反乱：3月31日事件とイスラーム主義（*Derviş Vahdeti ve Çavuşların İsyanı: 31 Mart Vak'ası ve İslamcılık*）』（2001）では『火山』紙を史料に「3月31日事件」前後のヴァフデティの言動を整理している。また事件後のヴァフデティの事情聴取の記録が日付ごとにまとめられている。ただし事件後の裁判および事情聴取に関する史料はジェラル・バヤルの研究（1965）の引用か、あるいは典拠が示されておらず、根拠となる史料が不明確である。コジャハンオウルは、「3月31日事件」は下士官らによって起こされた事件ではあるが、事件における「イスラーム主義」という側面を首謀者といわれたヴァフデティの言動から指摘した(84)。

このほか、出版という切り口で「3月31日事件」を評価する研究はいくつか散見される。例えばİ. A. オダバシュの「3月31日事件における出版に予期された猛威（31 Mart Vak'ası'nda Basına Yönelik Şiddet）」（2009）では、同時代の新聞各紙および執筆者が「3月31日事件」と関与した、あるいは関与を疑われたことによって危うい立場に追い込まれたことを指摘している。また K. アクユズ「イスタンブルの出版から見る3月31日事件（İstanbul Basınına Göre 31 Mart Vak'ası）」（2011）やF. チャクルの「ヒュセイン・ジャーヒトのタニン紙における論稿から見る3月31日事件（Hüseyin Cahid'in Tanin'deki Makalelerine Göre 31 Mart Olayı）」（2014）などの修士学位論文では、同時代の新聞各紙が政治的にどのような立場にあり、「3月31日事件」前後にどのような記事を刊行したのかをまとめ、事件の発生原因にも言及した。アクユズはオスマン語史料と『タニン』紙の記事から事件後の裁判判決とその罪人の氏名も列挙した(85)。

青年トルコ人革命により盛んになった新聞の刊行は、そもそも組織の機関紙として私的な意見を述べる目的により始まったことであるため、史料の偏りは否めない。そして刊行された新聞の全体数が多いため、同時代の定期刊行物およびオスマン知識人の見解を明らかにし、事件への影響力を分析するためには、さらなる分析作業が必要とされる。

3．おわりに

以上、「3月31日事件」に関する研究動向を整理した。トルコ語の修士・博士学位論文まで考慮すると「3月31日事件」に関する研究は枚挙にいとまがない。その一方で邦文では専論は存在しないのが現状である。

トルコ語の研究では、表2からも分かるとおり、「3月31日事件」における「イスラーム主義」という性質を前面に押し出すことはせず、軍人が実動を担って起こされた軍事的な事件として扱われてきた。ただし「3月31日事件」ではシャリーア法の権威が奪われないことが求められてきたため、事件に宗教的な性質が一切存在しなかったわけではない。シャリーア法の権威保持を求める主張は、必ずしも当時のオスマン帝国の人びとにとって特別なことではなく一般的な考え方であったともいえるが、後継諸国の一つであるトルコ共和国では同事件やデルヴィーシュ・ヴァフデティが「イスラーム主義」の象徴とみなされていたこともまた事実である。

一方の英文研究ではトルコ語の研究を参照しながらも、「3月31日事件」という名称より反動的（İrticâî）という評価や「ムスリム統一協会」およびヴァフデティの存在が重要視されたことにより、同事件は青年トルコ人革命の「反革命」や「イスラーム主義」運動の一つと性格付けされてきた。事件を客観的に評価することは必要な作業ではあるが、「反革命」や「イスラーム主義」という一面的な評価を下すことは本質を捉えにくくする恐れがある。先行研究の中には本当に「反革命」だったのか、と問題提起するものも存在したが、事件の本質を明らかにするにはいたっていない。

邦文研究では専論が存在しないが、政治、軍事、そして教育に関する各研究において「3月31日事件」の原因が指摘されてきた。また事件全体の評価としては、「イスラーム主義」や軍事反乱という一側面に言及しながらも、英文研究を踏襲する形で「反革命」と評価されてきた。

英文・邦文研究ともに、「3月31日事件」の専論が存在しないがゆえに同事件を青年トルコ人革命に付随するもの、つまり「反革命」として論じる傾向が強かったと指摘できる。

そして「3月31日事件」研究における問題点の一つに研究視点および史料の偏りが挙げられる。例えば事件前後の詳細を知るための史料は、政府各省の公的な記録、議会議事録、『官報』、回想録、英仏独国などの外交記録、同時代の定期刊行物などがある。ただしそもそも「3月31日事件」は、発生当初より立憲政に反する反動事件として厳しい態度がとられてきた。事件を鎮圧した「行動軍」の参謀がトルコ共和国初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルクであったため、後世のトルコ共和国でアタテュルクという正義に対して、「3月31日事件」は旧体制派による負の事件という印象がもたれている。加えて事件首謀者といわれたヴァフデティに関する史料が『火山』紙およびわずかな裁判記録のみである。客観的にヴァフデティの行動を詳らかにするための史料

が存在せず、「反革命」や「イスラーム主義」という一面的な評価に反駁するだけの史料が揃っているとは言い難い。

最後に、「反革命」という言葉が何に対して使われたのか、また付随して語られることの多い「イスラーム主義」的な要素がその「反革命」の評価によって変化するのか、の二点が今後の課題として残された。「反革命」と評価する英文研究の多くは、立憲革命および近代化とイスラーム復興という事件発生当時の時代潮流を土台に保守派勢力に言及することはあれども、一方で実動を担った軍人の存在を重要視しているようには見えない。この「反革命」という評価が、青年トルコ人革命を否定する意味での「反革命」であれ、立憲政と憲法がシャリーア法と共存できないという「イスラーム主義」と保守反動を意味するものであれ、1970年代以降高まる「イスラーム主義」の顕在化という時代潮流に沿って、研究史上においてもその宗教的な要素が強められたといえる。ただし「イスラーム主義」がシャリーア法を基本理念として新たな国家（ウンマ）の創造を目指すためのイデオロギーであるのならば、「3月31日事件」はオスマン帝国における「イスラーム主義」運動の一つとはいえないのではないか(86)。

史料の偏りだけではなく論点の偏りについてもより議論されるべき問題である。「3月31日事件」に関する新たな視点、新たな史料を元にしたさらなる研究や、あるいは既存の研究で用いられていた史料の新たな見解の出現が待たれる。

註

(1) 永田雄三・加賀谷寛・勝藤猛『中東現代史Ⅰ：トルコ・イラン・アフガニスタン（世界現代史11）』山川出版社, 1982; AVCIOĞLU, Doğan. *31 Martta Yabancı Parmağı*, Ankara, 1969. 永田は「3月31日事件」が「反革命」といわれながらも、結果として青年トルコ人革命をより一層促進することになったと述べた（p.102）。またアヴジュオウルは「3月31日事件」をムスタファ・ケマル・アタテュルクと世俗主義の対極の存在であるかのように位置付けた。

(2) 竹内和夫『トルコ語辞典　ポケット版』大学書林, 1989（第14版2015）; AYVERDİ, İlhan. *Misalli Büyük Türkçe Sözlük: Kubbealtı Lugatı*, cilt 1-3, İstanbul, 2005.

(3) LEWIS, Geoffrey L. *Turkey: Nations of the Modern World*, London, 1955; KARPAT, Kemal H. *Turkey's Politics: The Transition to a Multi-Party System*, Princeton, 1959; ZÜRCHER, Eric Jan. "The Ides of April: A Fundamentalist Uprising in Istanbul in 1909?," Van Dijk, C. & De Groot, A.H. (ed.), *State and Islam*, 1996. ルイス（1955年）やカルパト（1959年）が Thirty-First of March Incident や 31 March of Event とオスマン・トルコ語に基づいた表記をしていたにもかかわらず1996年ツルヒャーの Ides of April まで約40年間、英文では Counter-revolution と表記されていた。

(4) PARMAKSIZOĞLU, İsmet. "Otuzbir Mart Vak'ası," *Türk Ansiklopedisi (TA)*, cilt 26, 1977, ss. 197-199;

KAYALI, Kurtuluş. "Osmanlı Devletinde Yenileşme Hareketleri ve Ordu," *Tanzimat'tan Cumhuriyet'e Türkiye Ansiklopedisi (TCTA)*, cilt 5, 1985, ss. 1250-1258; SAKAOĞLU, Necdet. "Otuzbir Mart Olayı," *Dünden Bugüne İstanbul Ansiklopedisi(DBİst.A)*, cilt 6, 1994, ss. 184-188; ÖZCAN, Azmi. "Otuzbir Mart Vak'ası," *Türkiye Diyanet Vakfi İslâm Ansiklopedisi (DİA)*, cilt 34, 2007, ss. 9-11; BİRİNCİ, Ali. "31 Mart Vakası'nın bir Yorumu," *Türkler*, cilt 13, 2002, ss. 193- 211.

(5) DANİŞMEND, İsmail Hami. *İzahlı Osmanlı Tarihi Klonolojisi*, cilt 4, İstanbul, 1972, ss. 370-373.

(6) TUNÇAY, Mete. "Siyasal Tarih(1908-1923)," AKŞİN, Sina. (haz.) *Türkiye Tarihi 4, Çağdaş Türkiye 1908~1980*, İstanbul, 1989, ss. 27-81.

(7) BAYUR, Yusuf Hikmet. *Türk İnkılabı Tarihi*, cilt 1: kısım 2, Ankara, 1991, ss. 182-217.

(8) KARAL, Enver Ziya, *Osmanlı Tarihi IX. CİLT İkinci Meşrutiyet ve Birinci Dünya Savaşı (1908-1918)*, Ankara, 2011(1. baskı), ss. 75-108.

(9) TUNAYA, Tarık Zafer, *Türkiye'de Siyasal Gelişmeler, 1876-1938: Kanun-ı Esasî ve Meşrutiyet Dönemi, 1876-1918* (1. kitap), İstanbul, 2001, ss. 136-137, 233.

(10) İNALCIK, Halil. *Devlet-i 'Aliyye Osmanlı İmparatorluğu Üzerine Araştırmalar-IV: Âyânlar, Tanzimat, Meşrutiyet : Seçme Eserleri-X*, İstanbul, 2016, ss. 307-310.

(11) J. H. Kramers. "Osmanli," *Encyclopedia of Islam New Edition*, vol. 8, 1995, pp. 198-202; HANİOĞLU, M. Şükrü. "Nizam Askeri," *Encyclopedia of Islam New Edition*, vol. 12, 2004, pp. 675-678; MÜNGEÇ, Murat C. "Young Turks," *Encyclopedia of Islam and the Muslim World*, vol. 2, 2004, pp. 739-740; KAYALI, Hasan. "Committee for Union and Progress," *Encyclopedia of the Modern Middle East and North Africa*, vol. 1, 2004 (2nd ed.).

(12) LEWIS 1955, p. 43.

(13) KARPAT 1959, pp. 16-22.

(14) LEWIS, Bernard. *The Emergence of Modern Turkey*, Oxford, 1968 (1st ed. 1961), pp. 214-216.

(15) AHMAD, Feroz. *The Young Turks: The Committee of Union and Progress in Turkish Politics, 1908-14*, London, 2010, pp. 34-41 (1st ed. 1969); AHMAD, Feroz., YAVUZ, Nuran (çev.). *İttihat ve Terakki 1908-1914*, İstanbul, 1971, ss. 60-67.

(16) SHAW, J. Stanford. & SHAW, Ezel Kural. *Reform, Revolution, and Republic: The Rise of Modern Turkey, 1808-1975, History of the Ottoman Empire and Modern Turkey*, vol. 2, Cambridge, 1977, pp. 279-282.

(17) KINROSS, Lord. *The Ottoman Centuries: The Rise and Fall the Turkish Empire*, New York, 1977, pp. 576-581.

(18) KEYDER, Çağlar. *State and Class in Turkey: A Study in Capitalist Development*, London, 1987, pp.

57-58.

(19) アラン・パーマー著・白須英子訳『オスマン帝国衰亡史（*The Decline and Fall of the Ottoman Empire*）』中央公論社, 1998, pp. 318-320（英語原典 1996 年）.

(20) ZÜRCHER, Erik Jan. *Turkey: A Modern History*, London, 1993, pp. 100-104.

(21) HANİOĞLU, M. Şükrü. *The Young Turks in Opposition*, New York, 1995, p. 246.

(22) ZÜRCHER 1996; ZÜRCHER, Eric Jan. *The Young Turk Legacy and Nation Building: From the Ottoman Empire to Atatürk's Turkey*, London, 2010, pp. 73-83.

(23) McCARTHY, Justin. *The Ottoman Turks: An Introductory History to 1923*, New York, 1997, pp. 318-319; McCARTHY, Justin. *The Ottoman Peoples and the End of Empire*, New York, 2001, p. 31.

(24) MACFIE, A. L. *The End of the Ottoman Empire 1908-1923*, New York, 1998, pp. 39-55.

(25) KANSU, Aykut. *Politics in Post-Revolutionary Turkey, 1908-1913*, Leiden, 2000, pp. 77-125; KANSU, Aykut., SOMUNCUOĞLU, Selda (çev.). *İttihadcıların Rejim ve İktidar Mücadelesi, 1908-1913*, İstanbul, 2016.

(26) HANİOĞLU, M. Şükrü. *A Brief History of the Late Ottoman Empire*, Princeton, 2008, pp. 154-155; "The Second Constitutional Period, 1908-1918," KASABA, R. (ed.), *Cambridge History of Turkey*, 2008, pp. 62-111.

(27) 三橋冨治男「アブドゥル・ハミード 2 世」『アジア歴史学事典 1』平凡社, 1959, p. 64; 三橋冨治男「アブデュル・ハミット 2 世」『世界大百科事典』1 巻, 平凡社, 1981, pp. 281-282; 三橋冨治男「青年トルコ党」『世界大百科事典』17 巻, 平凡社, 1981, p. 238; 黒田壽郎編「オスマーン朝」『イスラーム事典』東京堂出版, 1983, p. 310-315. 永田雄三「アブデュルハミト二世」『平凡社大百科事典』1 巻, 1984, p. 370; 設樂國廣「青年トルコ」『平凡社　大百科事典』8 巻, 1985, p. 405; 設樂國廣「青年トルコ」『新イスラム事典』平凡社, 2002, pp. 309-310; 小松香織「アブデュルハミト二世」『岩波　イスラーム辞典』岩波書店, 2002, pp. 42-43; 設樂國廣「第二次立憲制（オスマン朝）」『岩波　イスラーム辞典』岩波書店, 2002, pp. 593-594; 設樂國廣「統一進歩団」『岩波イスラーム辞典』岩波書店, 2002, pp. 664-665.

(28) 永田 1982, p. 102.

(29) 設樂國廣「オスマン帝国におけるイスラムと民衆：青年トルコ人革命期を中心として（歴史における宗教と民衆＜シンポジウム＞＜特集＞）」『史潮』vol. 18, 1986, pp. 68-83[1986a]; 永田雄三「コメント（歴史における宗教と民衆＜シンポジウム＞＜特集＞）」『史潮』vol. 18, 1986, pp. 84-86, 67; 設樂國廣「近代イスラム世界の危機問題」『史潮』vol. 18, 1986, pp. 63-66[1986b].

(30) 永田雄三『西アジア史II：イラン・トルコ（新版世界各国史 9）』山川出版社, 2002, p. 322.

(31) 新井政美『トルコ近現代史』みすず書房, 2001, pp. 113-121

(32) 吉澤誠一郎「125　青年トルコ革命への関心（1910）（第 11 節　辛亥革命）」歴史学研究会編『帝国主義と各地の抵抗 II（世界史史料 9）』岩波書店, 2008, pp. 204-206.

(33) 新井政美『イスラムと近代化：共和国トルコの苦闘』講談社, 2013, pp. 143-147.

(34) 小笠原弘幸『オスマン帝国：繁栄と衰亡の 600 年史』中央公論新社, 2018, p. 261.

(35) ALPER, Remzi. "31 Mart Vak'ası," İstanbul Üniversitesi Edebiyat Fakültesi Kütüphanesi Tezler, 1944. (http://nek.istanbul.edu.tr:4444/ekos/TEZ/00924.pdf, 2021 年 2 月 27 日閲覧)

(36) BAYDAR, Mustafa. *31 Mart Vak'ası*, İstanbul, 1955.

(37) UNAT, Faik Reşit. *İkinci Meşrutiyetin İlanı ve Otuzbir Mart Hadisesi: II. Abdülhamid'in Son Mabeyn Başkâtibi Ali Cevat Bey'in Fezlekesi*, Ankara, 1991(1. baskı 1960).

(38) DANİŞMEND, İsmail Hami. *Sadr-ı-a'zam Tevfik Paşa'nın Dosyasındaki Resmi ve Hususi Vesikalara Göre : 31 Mart Vak'ası*, İstanbul, 1986 (1. baskı 1961).

(39) AKŞİN, Sina. *31 Mart Olayı*, İstanbul, 1970.

(40) AVCIOĞLU 1969.

(41) ALBAYRAK, Sadık. *31 Mart Gerici bir Hareket mi?(İrtica'ın Tarihçesi 1)*, İstanbul, 2015.（1987 年の初版からタイトルおよび出版社が変更され2015年に再版された。）ALBAYRAK, Sadık. *31 Mart Vakası Gerici bir Hareket mi?(İrtica'ın Tarihçesi 1)*, İstanbul, 1987.

(42) ÜLGENCİ, Berire. (Sadeleştiren) *Mevlanzade Rifat 31 Mart bir İhtilalin Hikayesi*, İstanbul, 2010 (1. baskı 1996).

(43) ŞEREF, Abdurrahman., KODAMAN, Bayram. & ÜNAL, Mehmet Ali. (haz.) *Son Vak'anüvis Abdurrahman Şeref Efendi Tarihi; II. Meşrutiyet Olayları(1908-1909)*, Ankara, 1996, ss.149-180.

(44) KOCAHANOĞLU, Osman Selim. *31 Mart Ayaklanması ve Sultan Abdülhamid*, İstanbul, 2009.

(45) ALPASLAN, Teoman. *31 Mart Ayaklanması: Yüz Yılda Ne Değişti?*, İstanbul, 2015(1. baskı 2009).

(46) ALKAN, Necmettin. *Selanik İstanbul'a Karşı; 31 Mart Vak'ası ve II. Abdülhamid'in Tahttan İndirilmesi*, İstanbul, 2011. 軍や統一と進歩協会に着目した研究としては次の研究も挙げられる。ALKAN, Necmettin. *Selanik'in Yükselişi: Jön Türkler Abdülhamid'e Karşı 1908 İhtilali*, İstanbul, 2012.

(47) PEKMEN, Said Mahir., BABACAN, Hasan. & AVŞAR, Servet. (haz.) *31 Mart Hatıraları İsyan Günlerinde bir Muhalif*, Ankara, 2013.

(48) YILDIZ, Sıddık. *31 Mart İsyanı: Gizemini Koruyan bir İsyan...Çıkışından Bastırılmasına Kadar*, İstanbul, 2017.

(49) HANİOĞLU, M. Şükrü. "İttihat ve Terakki Cemiyeti," *DİA*, cilt 23, 2001a, ss. 476-484; "Jön Türkler," *DİA*, cilt 23, 2001b, ss. 584-587.

(50) TUNAYA, Tarık Zafer. *Türkiye'de Siyasi Partiler, 1859-1952*, cilt 1, İstanbul, 1952, ss. 216-237.

(51) 設樂國廣「『青年トルコ人』運動の展開をめぐって」『イスラム世界』vol. 11, 1976, pp. 27-50; 設樂國廣「青年トルコ人革命前史：レスネのニヤーズィ蜂起の歴史的意義」『オリエント』vol. 21, no. 1, 1978, pp. 91-108; 設樂國廣「第二次立憲体制成立直後の状況：青年トルコ人革命の内部抗争」『イスラム世界』vol. 16, 1979, pp. 33-46. 例えば「干渉容認派」は Dış müdahaleci/ Müdahale Taraftarı、「干渉排除派」は Dış Müdahale karşıtı/Adem-i Müdahale Taraftarı などと表記される（ALKAN 2011, HANİOĞLU 2001a）。

(52) 設樂 1979; KANSU 1997; KANSU 2000; 新井 2001; AHMAD 2010.

(53) AKŞİN, Sina. *Jön Türkler ve İttihat ve Terakki*, İstanbul, 1998, ss. 163-186 (1. baskı 1987). ヴァフデティの事情聴取に関しては後述する次の二点の研究内で詳細が記されている。BAYAR, Celal. *Ben de Yazdım: Milli Mücadele'ye Gidiş*, cilt 1, 2, İstanbul, 1965, 1966; KOCAHANOĞLU, Osman Selim. *Derviş Vahdeti ve Çavuşların İsyanı: 31 Mart Vak'ası ve İslamcılık*, İstanbul, 2001.

(54) DURDU, Mehmet Burak. "Osmanlı Devleti'nde Jön Türk Hareketlerine Başlaması ve Etkileri," *Ankara Üniversitesi Osmanlı Tarihi Araştırma ve Uygulama Merkezi Dergisi*（以下、*OTAM*）, cilt 14, 2003, ss. 291-318.

(55) 藤波伸嘉『オスマン帝国と立憲政：青年トルコ革命における政治、宗教、共同体』名古屋大学出版会, 2011, pp. 96-97, 110-117.

(56) TURFAN, M. Naim. *Rise of the Young Turks: Politics, the Military and Ottoman Collapse*, London, 2000, pp. 156-162; MORALI, Mehmet. (çev.) *Jön Türklerin Yükselişi: Siyaset, Askerler ve Osmanlının Çöküşü*, İstanbul, 2003, ss. 196-200.

(57) KARABEKİR, Kazım. *İttihat ve Terakki Cemiyeti*, İstanbul, 2009, ss. 263-279.

(58) ÜNAL, Hasan. "Britain and Ottoman Domestic Politics: From the Young Turk Revolution to the Counter-Revolution, 1908-9," *Middle Eastern Studies*, vol. 37, no. 2, 2001, pp. 1-22.

(59) 佐原徹哉『中東民族問題の起源：オスマン帝国とアルメニア人』白水社, 2014, pp. 41-46, 259-265.

(60) TÜRKMEN, Zekeriya. "Hareket Ordusu," *DİA*, cilt 16, 1997, ss. 125-127; ÖZCAN *DİA* 2007.

(61) KURAN, Ahmet Bedevi. *Türk İnkılap Tarihimiz ve "Jön Türkler,"* İstanbul, 1945, ss.276-283. 後述する設樂の研究では同部隊を「憲法擁護部隊」と名付けた。設樂國廣「青年トルコ人とオスマン朝軍：将校の出自に関する問題を中心に」『中嶋敏先生古稀記念論集（下巻）』, 1981, pp. 565-579.

(62) SWENSON, Victor R. "The Military Rising in Istanbul 1909," *Journal of Contemporary History*, 1970, vol. 5, no. 4, pp. 171-184.

(63) ALKAN, Ahmet Turan. *İkinci Meşrutiyet Devrinde Ordu ve Siyaset*, Ankara, 1992, ss. 79-88.

(64) İRTEM, Süleyman Kani., KOCAHANOĞLU, Osman Selim. (haz.) *31 Mart İsyanı ve Hareket Ordusu:*

Abdülhamid'in Selânik Sürgünü, İstanbul, 2003.

(65) 設樂 1981; 設樂國廣「行動軍の指導理念の変化」(護雅夫編)『内陸アジア・西アジアの社会と文化』山川出版社, 1983, pp. 799-821.

(66) KAYALI *TCTA* 1985; KAZICI, Ziya. "Alaylı," *DİA*, cilt 2, s. 350.

(67) ÖLMEZ, Adem. "Gazi Ethem Paşa'nın Askeri ve Siyasi Hayatı (1844-1909)," İstanbul Üniversitesi Doktora Tezi, 2004; ÖLMEZ, Adem. "Modernleşme Çağında Osmanlı Askerinin 'İktidar'la İmtihanı," *Darbeler Tarihi*, İstanbul, 2017, ss. 72-83; ÖLMEZ, Adem. *Modern Osmanlı Ordusunda Alaylılar ve Mektepliler* (1826-1918), İstanbul, 2017, ss. 245-257.

(68) ASLAN, Taner. "31 Mart Hadisesi Üzerine Vilayetlerde Çıkan Olaylar Karşısında Alınan Tedbirlere ve Askerî Faaliyetlere Dair Yazışmalar," *OTAM*, cilt 28, 2010, ss. 1-26.

(69) ZEYREK, Suat. & AKMAN, Halil. "31 Mart İsyanının Osmanlı Ordusu Üzerindeki Etkileri," *Journal of History Studies*, cilt 6, sayı 3, 2014, ss. 383-398.

(70) BOZAN, Oktay. "31 Mart Olayının Taşradaki Yanıkları; Diyarbakır Örneği," *SBArD*, cilt 15, sayı 1, 2017, ss.107-132.

(71) 設樂國廣『ケマル・アタテュルク：トルコ国民の父（世界史リブレット人 86)』山川出版社, 2016, pp. 6-12.

(72) ÖZCAN, Azmi. *Pan-İslamizm Osmanlı Devleti Hindistan Müslümanları ve İngiltere (1877-1924)*, Ankara, 1997, ss. 172-173; ÖZCAN, Azmi. "İttihâd-ı Muhammedî Cemiyeti," *DİA*, cilt 23, 2001, ss. 475-476; ÖZCAN *DİA* 2007.

(73) ZÜRCHER, Erik Jan. "The Ottoman Conscription System, 1844-1914," *International Review of Social History*, vol. 43, no. 3, 1998, pp. 437-449. 同論文は ZÜRCHER 2010 に収録された。

(74) ERGÜN, Mustafa. "II. Meşrutiyet Döneminde Medreselerin Durumu ve Islah Çalışmaları," *Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Dergisi*, cilt 30, sayı 1/2, 1982, ss. 59-89.

(75) 秋葉淳「オスマン朝末期イスタンブルのメドレセ教育：教育課程と学生生活」『史学雑誌』vol. 105(1), 1996, pp. 62-84; 秋葉淳「アブデュルハミト二世期オスマン帝国における二つの学校制度」『イスラム世界』vol. 50, 1998, pp. 39-63; 秋葉淳・橋本伸也編『近代・イスラームの教育社会史：オスマン帝国からの展望』昭和堂, 2014, pp. 26-50.

(76) BEİN, Amit. "Politics, Military Conscription and Religious Education in the Late Ottoman Empire," *International Journal of Middle East Studies*, vol. 38, no. 2, 2006, pp. 283-301.

(77) 藤波 2011, pp. 145-150.

(78) GUNASTİ, Susan. "The Late Ottoman Ulema's Constitutionalism," *Islamic Law and Society* , vol. 23, no. 1/2 , 2016, pp. 89-119.

(79) ASLAN, Taner. "31 Mart Hadisesi Üzerine Vilayetlerde Çıkan Olaylar Karşısında Alınan Tedbirlere ve Askerî Faaliyetlere Dair Yazışmalar," *OTAM*, cilt 28, 2010, ss. 1-26; COŞAR, Şahin. "31 Mart Vakasına Ulemanın Bakışı," İstanbul Üniversitesi Yüksek Lisans Tezi, 2018.

(80) GÜNYOL, Vedad. "Matbuat, II. Türkler," *İA*, cilt 7, 1972, ss. 367-379; KOLOĞLU, Orhan. "BASIN, Osmanlı Basını: İçeriği ve Rejimi," *TCTA*, cilt 1, 1985, ss. 68-93; 伊藤彩「オスマン帝国末期における出版と「3月31日事件」:『火山 *Volkan*』紙の分析を中心に」『明大アジア史論集』19, 2015, pp. 32-76.

(81) BAYAR 1965, ss. 380-392; BAYAR 1966, ss. 155-163, 184, 198-199.

(82) DÜZDAĞ, M. Ertuğrul. *Derviş Vahdeti: Volkan Gazetesi 1908-1909*, İstanbul, 1992; DÜZDAĞ, M. Ertuğrul. "1908-1909 Yıllarında Yayınlanan Dînî Siyâsî Günlük Gazete," *İkinci Meşrutiyet Devrinde Basın ve Siyaset*, HAKAN, Aydın. (haz.), Konya, 2010, ss. 211-220; DÜZDAĞ, M. Ertuğrul. "Volkan," *DİA*, cilt 43, 2013, ss. 123-125.

(83) KURŞUN, Zekeriya. & KAHRAMAN, Kemal. "Derviş Vahdeti," *DİA*, cilt 9, 1994, ss. 198-200; ÖZCAN *DİA* 2001.

(84) KOCAHANOĞLU 2001.

(85) ODABAŞI, İ. Arda. "31 Mart Vak'ası'nda Basına Yönelik Şiddet," *Müteferrika*, 2003: 2, ss. 91-114; AKYÜZ, Kamil. "İstanbul Basınına Göre 31 Mart Vak'ası," Kastamonu Üniversitesi Yüksek Lisans Tezi, 2011; ÇAKIR, Fatma. "Hüseyin Cahid'in Tanin'deki Makalelerine Göre 31 Mart Olayı," Karadeniz Teknik Üniversitesi Yüksek Lisans Tezi, 2014.

(86) 大塚和夫・小杉泰「イスラーム主義」『岩波　イスラーム辞典』岩波書店, 2002, pp. 138-140; 粕谷元「トルコのイスラーム潮流：ヌルスィーとギュレン」小松久男・小杉泰編『現代イスラーム思想と政治運動（イスラーム地域研究叢書②）』東京大学出版会, 2003, pp. 63-83.　粕谷はサイド・ヌルスィー（生没 1876/7-1960）が『火山』紙および「3月31日事件」へ関わっていたことを指摘しながらも、同事件を青年トルコ人革命への反革命、と評した。